

イーハトーブの空の下、新たな伝統を築く

— 岩手大学獣医学部設置から一年を振り返って —

佐藤 洋[†]（岩手大学獣医学部長 獣医学研究科長）



はじめに
東北唯一の国立獣医教育拠点としての「学部設置」

2025年4月、岩手大学農学部共同獣医学科は、四半世紀以上の歴史を経て「獣医学部」として農学部より独立し、新たな歴史を刻み始めた。これは単なる学内組織

の名称変更ではなく、第一に、学生たちがより高度で専門的な教育環境を享受し、将来への可能性を広げるための「学生ファースト」の視点に立った改組であった。また同時に、東日本における獣医医療・教育のハブ機能を最大化させるための、地域の要請に応える決断であった。

本学部のルーツを辿れば、1902年（明治35年）に設立された日本初の公立高等農林学校である盛岡高等農林学校へと辿り着く。設立当初は農学科、林学科、獣医学科の3学科で構成されていた。当時の校旗には、農学科を象徴する「黄」、林学科の「緑」、そして獣医学科の

「赤」がデザインされている。歳月の流れとともに、「黄」と「緑」の伝統は、社会のニーズの変化に合わせ、より多くの専門分野へと発展的に細分化・統合され、現在の農学部の多様な学科群へと受け継がれている。その中で、獣医学科を象徴する「赤」だけは今なお鮮明に残り続けている。この色褪せぬ赤は、いつの時代も情熱を持って動物の命と向き合ってきた本学科の矜持そのものである。

また、本学は詩人であり童話作家の宮沢賢治が学んだ地でもある。賢治は盛岡高等農林学校の農学科に学び、その多感な時期をこのキャンパスで過ごした。彼が描いた理想郷「イーハトーブ」の思想や、動物を含む生命への深い慈しみは、今もお本学の教育理念の底流に息づいている（図1）。今回の学部設置にあたり、獣医学部は「高貴な紫」を新たなベースカラーとして採用した。この紫は、本学の校章や校歌のデザインにもなっている「桐の花」の色と重なる。120余年の伝統を象徴する赤を胸に刻みつつ、学部として独立し、より高みを目指す決



図1 岩手大学の獣医学部・農学部エリアキャンパス

手前中心の建物は宮沢賢治が学んだ旧盛岡高等農林学校（現農業教育資料館）、その後ろに位置する建物が獣医学部1号館。

[†] 連絡責任者：佐藤 洋（岩手大学獣医学部）

〒020-8550 盛岡市上田三丁目18番8号 ☎・FAX 019-621-6103 E-mail: satohsss@iwate-u.ac.jp

意をこの高貴な紫に託したのである。

学部設置を記念して挙行された式典や祝賀会には、文部科学省、岩手県、そして日本獣医師会の藏内勇夫会長をはじめ、政・官・学、獣医界の要職にある方々にご列席を賜った。藏内会長をはじめとする諸先生方からの祝辞に共通していたのは、新学部が担うべき「社会的な責任」への強い期待であった（図2）。特に、佐藤 繁名誉教授による特別講演「岩手大学の獣医学教育に期待する！」は、長年本学を支えてこられた立場からの「未来への提言」であり、われわれ教職員・学生一同が、独立した学部として背負うべき責任の重さを再認識させるものであった。

現在、わが国の獣医界は、分野的・地域的な獣医師の偏在という構造的課題に直面している。藏内会長を筆頭とする各界からの期待、そして受け継がれてきた情熱を礎に、学生たちが多岐にわたる社会や地域の要請に応えられる人材へと成長できるよう強力にバックアップすることこそが、本学部の最優先課題である。

学部改組の経緯と背景：

共同教育の深化と国際標準への適合

学部設置に至る道程は、決して平坦なものではなかった。そこには歴代の先人たちが抱き続けてきた「学部としての独立」への強い念がある。農学部の一学科という枠組みにおいても、本学の教育は一定の質を維持してきたが、組織的制約がさらなる進展を阻む壁となっていたことも事実である。

歩みの中で特筆すべきは、2012年度より開始された東京農工大学との「共同獣医学科」の設置である。国立大学法人化以降の厳しい環境下、両大学がリソースを出し合い、補完し合うことで高度な専門教育を維持・発展させてきた。この「共同教育による質の保証」という成功体験が、次なるステップへの確固たる自信となった。

しかし、教育の質が高まるほど、獣医学の特殊性と既存の枠組みとの齟齬も顕著になった。獣医学は公衆衛生や食の安全、環境保全まで包含する公共性の高い学問である。提供される教育は、社会インフラを支える「獣医師」という専門職の「責任」を担保するためのものでなければならない。地域社会の変容や、高度な臨床ニーズに即応するためには、迅速な意思決定と独自のガバナンスを持つ「学部」としての独立は、まさに地域の要請と学生に求められる教育環境に応えるための必然であった。

また、国際的な視点からも、国際獣疫事務局(WOAH)の基準や欧州獣医学教育機関協会(EAEVE)の認証制度に象徴される「教育の質保証」と国際通用性の確保が厳格に求められている。独立した「獣医学部」としてのガバナンスを確立し、世界水準の教育環境を自ら管理・運営することは、世界に通用する獣医師を育成するため



図2 獣医学部看板除幕式

左は小川前学長、右は筆者。

の国立大学としての義務でもあった。東京農工大学との連携は、学部設置を成し遂げた現在においても継続しており、むしろ機動的な協力体制へと深化している。先人たちが夢に描き、共同教育によって磨き上げられてきた努力が、この「学部設置」という形で結実したのである（図3）。

新学部が担う地域獣医療の高度化と社会的責任

学部設置の最大のメリットは、地域が直面する課題や学生の教育ニーズに対し、獣医学の専門的見地から迅速かつダイレクトにリソースを投入できるようになった点にある。

本学部は、人口約28万人を擁する岩手県の中心地・盛岡市に位置する。この立地を最大限に活かし、附属動物病院は東北地域獣医療の「最後の砦」として、伴侶動物における高度二次診療を網羅し、近隣の開業医との緊密な連携のもと難症例を受け入れている。一方で、病院の機能は都市型の診療にとどまらない。畜産県・岩手を中心とした東北全域をカバーする高度な産業動物臨床を展開しており、この「伴侶動物と産業動物の臨床教育がきわめて高いレベルで均衡している」ことこそが、本学部の最大の強みである。

この強みを支える教育の原点は、新入生全員がまず牛の出産に立ち会い、命の神秘さと尊さを体感することから始まる。この経験が生命への畏敬の念を刻み、その後の多岐にわたる学びの基礎となる。これを加速させているのが、共同獣医学教育の枠組みを活かした「参加型臨床実習」である。そのフィールドは附属施設にとどまらず、NOSAI岩手を始めとしたNOSAI東北、家畜改良センター岩手牧場、八幡平市繁殖育成センター、盛岡市動物公園ZOOMO、盛岡市鳥獣保護センターなどなど、地域全域に広がっている（図4、5）。

伴侶動物領域においては、さらなる高度医療と圧倒的な症例数を経験させるべく、本学の学生が東京農工大学

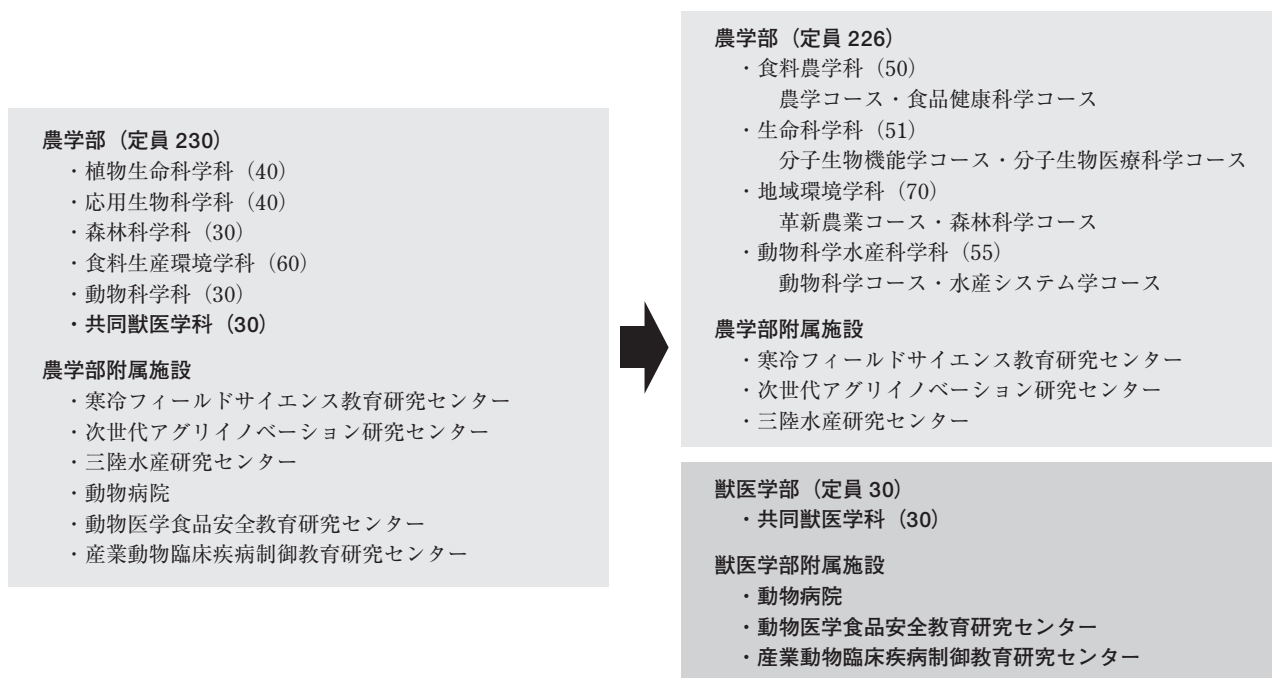


図3 学部設置における農学部の改組



図4 実習風景

学部生は1年次から附属農場や動物保護施設に赴き産業動物や野生動物臨床の現場を体感する。
附属農場での実習の一コマ（左）、参加型臨床実習で一コマ（右）



図5 実習風景

伴侶動物実習では、参加型臨床実習において附属動物病院（左）や提携先：盛岡市動物公園 ZOOMO の動物診療にて、実践的な臨床現場を経験する（右）。

へ赴く。大都市における高度医療の最前線に身を置くことで、現場のスピード感と緻密さを五感で体感する。一方、東京農工大学の学生は畜産県である本学へと足を運び、二週間にわたり産業動物臨床の現場に密着する。附属農場やNOSAI、行政施設等において、牛や馬といった大動物と格闘する日々は、都会では決して得られない臨床の奥深さや、食の安全を支える獣医師の矜持に触れる貴重な機会となる。この「岩手と東京」というきわめて対照的なフィールドの相互交流は、学生の将来の進路選択に確かな影響を与えている。

学生は、都市部と畜産現場という二つの最前線を同時に体験することで、専門職としての厳しさと醍醐味を学び、卒業後ただちに社会へ貢献できる実践力を養っている。

FAMS・FCDを核とした「科学に裏打ちされた実践」と広域的な臨床教育拠点化

本学部の実践・研究の柱が、附属動物医学食品安全教育研究センター（略称FAMS）と、より専門的な臨床教育と疾病制御を担う附属産業動物臨床・疾病制御教育研究センター（略称：FCD）である。

FAMSは、岩手の広大な畜産フィールドを背景に「Farm to Table（農場から食卓まで）」の理念を具現化する教育拠点である。学生は低学年次から農場HACCPやと畜検査の実習を通じ、目の前の個体を治療することが、巡り巡って公衆衛生の維持や国民の食の安全に直結していることを実体験として理解する。これに対しFCDは、その名称が示すとおり、産業動物臨床における高度な診断と疾病制御に関する先端的な教育研究を担っている。FAMSで得られた現場の課題をFCDが科学的に解明し、その知見を再び教育や地域社会へフィードバックする。この「実践」と「科学」の循環こそが、本学部の標榜する教育の姿である。

特筆すべきは、本学が東日本における産業動物臨床教育の「基幹拠点」としての機能を急速に強化している点である。現在は東京農工大学との共同教育の枠組みを超え、国内外の他大学から多くの学生や研修生を受け入れる組織整備を進めている。その実績はすでに結実しており、国内では東京大学、国外からは韓国の江原大学校（KNU）からの学生を受け入れている。さらに、産業動物臨床に関する研修会を多数開催し、帯広畜産大学、酪農学園大学、北里大学、日本獣医生命科学大学、日本大学、麻布大学といった北海道を含めた東日本及び関東の国立・私立獣医系大学や他機関から、多くの志高い研修生が集い、大学の垣根を越えた学びの場を提供している。このように、岩手の豊かな資源を「日本全体の獣医学教育」のために開放し、他大学の学生が本学で産業動物臨床の真髄に触れることは、将来の進路選択における産業動物・公務員領域への関心を高める大きな契機と

なっている。

また、本学部は学生教育にとどまらず、現場の獣医師を対象としたリカレント教育にも注力している。FAMS・FCDが有する高度な解析機能と知見を活かし、地域の公務員獣医師や産業動物臨床医を対象とした専門的な研修プログラムを定期的に開催している。日々進化する感染症対策や食品安全基準に対し、最新の科学的エビデンスに基づく研鑽の場を提供することは、地域獣医療の質の維持・向上に直結する重要な責務であると考えている。

附属動物病院が伴侶動物・産業動物の二次診療を支え、FAMS/FCDが現場実践と先端研究をリードし、さらには「One Health」の視点から野生動物問題にも即応する。自然を科学的に理解し、人間社会との適切な距離感を模索・提言することは、地域に根ざし、かつ日本全体の獣医療に貢献する国立大学獣医学部としてのきわめて重要な社会的役割である。

未来を拓く教育戦略：

アドバンス・カリキュラムと社会実装への挑戦

本学部が高度専門教育の柱として構想しているのが、5・6年次を対象とする「アドバンス・カリキュラム」である。これは、現在の学部学生が上級年次に進む際、自身の志向に合わせて「基礎・病態・応用獣医学」あるいは「伴侶動物高度診療」「産業動物生産獣医療」等の各コースを選択し、徹底した少人数制の「参加型演習」を展開するものである。この演習は、高度な臨床スキルの習得のみならず、最先端の基礎研究や社会課題の解決に向けた探究をも含み、学生の指向性と専門性を多角的に研ぎ澄ますことを目的としている。特に産業動物コースでは、将来的に非地上系ネットワーク（NTN）を活用した遠隔診療シミュレーションの導入を検討している。これは、獣医師不足が深刻化する広域自治体において、限られた人員でいかに地域獣医療を維持するかという課題への挑戦である。次世代の獣医師には、卓越した臨床能力に加え、ICTを効果的に運用して地域獣医療体制の構築者としての視座も養ってほしいと願っている。

2028年度から始まる「第5期中期目標期間」を見据えた戦略的な展開として、教育面では、WOAH（国際獣疫事務局）基準に準拠した教育体制を定着させ、卒業生が臨床現場の第一線で活躍するための基礎的能力である「Day 1 Competency」をより確実なものとすることを目指していく。本学は東日本における産業動物実習のハブ拠点として、国内他大学からの学生受け入れを体系化するだけでなく、今後は海外大学との学生・教員の相互派遣や教育プログラムの共同開発など、教育の国際交流もさらに活発化させ、多角的な視点を持つ獣医師の育成に寄与していきたいと考えている。

研究面においては、FAMS 及び FCD を中核に据え、感染症制御や薬剤耐性菌（AMR）対策、獣医師不在地域における遠隔診療技術の開発や実装等に関する研究を産学官連携によって積極的に展開していく方針である。現在進めている KNU 等との国際共同研究をさらに拡大させるとともに、欧米やアジア諸国の研究機関との新たな連携も視野に入れている。こうした重層的な国際ネットワークを構築することで、「岩手のフィールドだからこそ可能な、世界水準の獣医学」の確立に向けて、一歩ずつ歩みを進めている。

国際標準教育・研究施設整備構想と 継続的維持に向けた決意

これらのビジョンを具現化するための最重要プロジェクトとして、現在、国際基準のバイオセキュリティ機能を有する「独立型剖検室」及び「感染実験施設」の整備を構想している。新興・再興感染症や未知の疾患の脅威から地域を守り、かつ高度な臨床教育を実践するためには、厳密な封じ込め機能（ゾーニング）を備えた解析施設が不可欠である。新施設は、既存の研究・教育エリアから物理的に分離・独立させ、高度な空調制御や排水処理設備を完備することで、病原体の外部漏出を徹底して防ぐ構造を基本とする。ここでは、産業動物から伴侶動物に至るまで、さまざまな動物の斃死体等の病理解剖を安全かつ迅速に実施し、その結果を速やかに臨床現場や地域へ還元する「総合的な病態解析の拠点」としての運用を目指している。

一方で、国立大学を取り巻く財務状況はきわめて厳しく、こうした大規模な設備投資を単独で賄い、かつ将来にわたって高い安全性を維持していくことは大きな挑戦である。国際水準の教育・研究環境を整え、次世代へ繋いでいくためには、国からの継続的な財政支援が欠かせない。われわれは今後も、概算要求をはじめとするあら

ゆる機会を通じ、ハード面の国際化・高度化に向けた改修と維持管理を粘り強く働きかけていく所存である。また、DX 要素を組み込んだ「バーチャル剖検」やウェブ講習の展開も含め、地域全体の防疫レベルを底上げするリカレント教育の場としても活用したい。これこそが、地方創生を担う獣医学部が果たすべき、インフラ面での社会的責任であると考えている。

結 び に

伝統を礎とした不断の挑戦

学部設置から一年が経過した。先般の第 77 回獣医師国家試験において、本学の卒業生は一定の成果を収めることができた。しかし、全国にはさらに高い合格率を達成している大学も少なくなく、われわれが現状に甘んじることが許されない。現役生への教育充実はもとより、既卒者に対してもきめ細やかな支援を継続し、最終的には全ての卒業生が獣医師としての第一歩を確実に踏み出せる「真の全員合格」の実現を、揺るぎない目標として掲げ続けたい。

本学部の歩みはこれからも続く。2027 年度（令和 9 年度）には、本学が主幹となり、第 170 回日本獣医学会大会を盛岡の地で開催する予定である。新学部設置から 3 年目の節目に全国の仲間をお迎えできることは、教職員一同の大きな誇りである。本大会では、岩手らしいテーマを掲げた公開講座などを通じ、地域社会と共に獣医学の未来を展望する機会としたい。

かつて盛岡高等農林の校旗に鮮明に残された「赤」の情熱を胸に、そして桐の花の「紫」を新たなシンボルとして、岩手大学獣医学部は地域を愛し、世界に通用する獣医師を育成し続ける。これからも日本の獣医事の実現と持続可能な社会の実現のために、不退転の決意で邁進していきたい。